看護業務の効率化
試行支援(コンサルテーション)事業

社会医療法人財団　大樹会
総合病院
回生病院

選択した取組(2019年度受賞)

外来病棟一元化による勤務環境改善

〈今年度取組を実施するための支援を希望〉

支援施設　国民健康保険 小松市民病院

試行期間　2020/9/1～2021/1/31

プレゼン動画視聴はこちら ▶

施設概要

皆様に愛され、信頼される病院を目指す

社会医療法人財団 大樹会 総合病院　回生病院

所在地	香川県坂出市
従業員数	619名　うち看護職員数：305名(2020年12月1日現在)
病床数	397床　（一般病棟346床、精神病棟51床）
入院基本料看護配置	急性期一般入院基本料1

背景・目標

現状と課題

- 2012年に外来業務をグループ化（類似した診療科を集めて複数のグループを構成）し、病棟外来の一元化に取り組んだが定着しなかった。また、外来から病棟への一方的な、特定の処置のみを実施する業務応援という形になってしまい、外来・病棟間での患者の継続看護の観点で課題があった。
- 外来看護師は、育児短時間勤務者、夜勤が実施できない常勤職員が多く、限られた人材のなかで、急な休みへの対応、時間外勤務の偏りの調整が必要であった。また、受け持つ診療科がある程度固定されていることで、診療科ごとに業務過多が生じるなど、勤務体制や人材のローテーションに課題があった。
- 外来・病棟間の情報共有の内容に個人差があり、統一した情報共有と、外来・病棟間の連携を充実させたいと考えていた。

目標

■ 試行期間における目標

2021年2月までに、整形外科外来と一般病棟一部署の看護業務一元管理の運用方法を確立し、実行・定着することができる

■ 施設の最終目標

外来・病棟の一元化を推進し、職場環境の改善と継続看護の推進につなげる

具体的な試行計画

試行計画

2012年	**外来・病棟の応援体制構築**	● 外来業務をグループ化し、病棟と一元化して外来・病棟間の相互応援体制に取り組んだ (現在は外来専従看護師のみで実施)。
2020年 9月	**モデル診療科の選定**	● 事例「外来病棟一元化による勤務環境の改善」読み合わせ。 ● 一元化部署と診療科を決定し（関節外科外来と5B病棟）、実施計画、関連部署への説明を実施。
試行支援事業		
2020年 10月	**ワーキンググループ発足** **マニュアル作成**	● 外来と病棟のコアメンバーによるワーキンググループを発足し、意見交換を行う。 ● 外来課長から外来看護師ら全員に今回の取組を周知。幹部会で看護部長より病棟師長らに発信し、病棟全スタッフにも周知。 ● 業務内容の整理・見直しを行い、マニュアルを作成。
11月	**関連診療科等へ説明**	● マニュアルを周知し、関連する診療科に説明し、協力を得る。
12月	**プレテストを実施**	● プレテストとして整形病棟(関節外科)の患者を3名ピックアップし、外来看護師による病室訪問を実施。
2021年 1月	**プレテストの評価**	● プレテストの評価を行い、課題を抽出した上で、記録の簡略化など次のステップの検討を開始した。今後、病棟から外来への訪問を実施するための準備を進めていく。

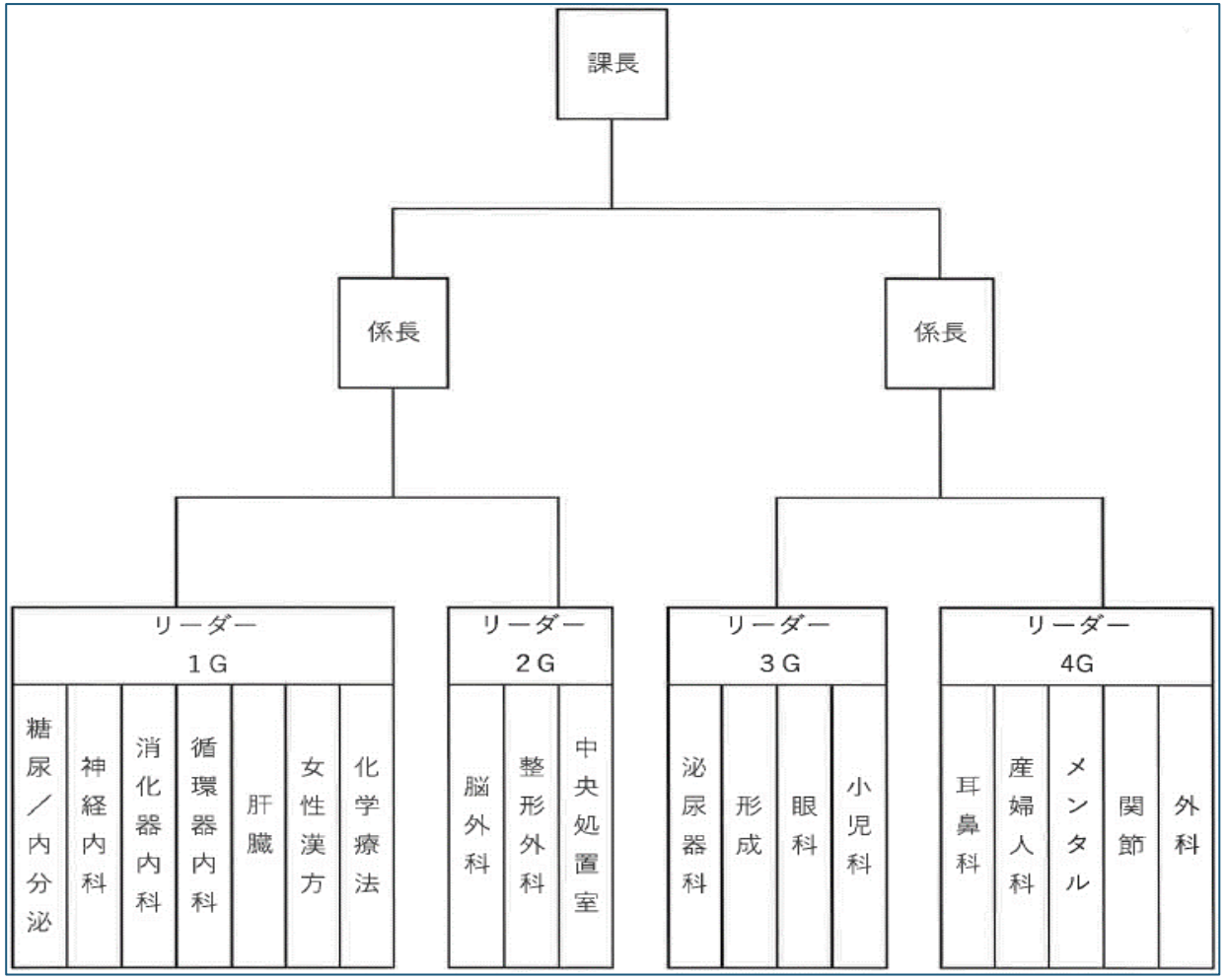
取組状況

■導入にむけた準備

組織図の再検討

- 支援施設より、取組をスタッフへ周知するために、戦略的に組織図を「見える化」し視覚効果を狙うことも効果的、との助言を受け、外来診療科をグループ化した組織図を修正した。

- 係長をリーダーとして4つのグループに分け、チームリーダー看護師をそれぞれ任命し、各グループの目標に沿った具体的な活動計画を立てて実践している。



取組状況

■導入にむけた準備

モデル診療科の選定

- 関節外科病棟・外来をモデル診療科に選定した。
- 選定理由：長期に外来受診されている方が多く、患者と医師との信頼関係が構築されており、継続的に関わる体制が整いやすいと考えられるため。また、入院期間が長く、外来看護師が退院後に向けた情報収集がしやすく、患者の状態変化が予測しやすいため。

前回導入時の反省点を踏まえた改善ポイント

- **キーワードは外来・病棟間の“訪問”**
  - 以前の取組では外来・病棟間の“応援”という言葉を使っていたが、どうしても応援と聞くと業務の手伝いというイメージがあり、処置の実施のみとなってしまい、「継続看護」および「患者ケア」の視点での業務に課題があった。
  - 今回の取り組みでは、外来・病棟間の“訪問”という言葉で、継続看護を意識した連携を目指すこととした。

取組状況

■プレテストの実施

以前は病棟から外来への一方的な応援に留まっていたため、「応援」イメージの払拭と、外来・病棟双方向の取組を根付かせるため、プレテストとして外来看護師による病棟「訪問」を開始した。

プレテストの実施方法

- 整形外科の入院患者3名をピックアップして、プレテスト(外来看護師による病棟訪問)を開始。
- 外来看護師は、ADLの移行期(車椅子から松葉杖への変更など)に病室を訪問し、患者とのコミュニケーションをとりつつ、現在不安に感じていることや退院後の目標などを聞いている。
  →電子カルテへ「外来看護師による病棟訪問」として記載し、病棟看護師、他職種と共有できるようにした。
- 訪問実施時間は、外来の業務状況をみて、リーダー役割を担う外来看護師が調整している。
- マニュアル「外来看護師による病棟訪問」を作成し、外来訪問の目的・目標、具体的な実施内容について記載。
  - ・全診療科共通の内容と、診療科の特性に応じた個別の内容について、今後検討していく予定。
  - ・「病棟看護師による外来訪問」マニュアルも今後作成予定。

取組状況

病棟・外来の情報共有方法の検討

病棟・外来間の継続看護の実現にむけて、患者情報の効果的な共有のための
看護記録の方法・内容等について見直しを行った。

● 外来看護師・病棟看護師の訪問目的の明確化

【外来看護師】手術終了後や退院前に、現在不安に感じていることや退院後の目標等を把握する。

【病棟看護師】外来受診時に退院後の生活で困ったこと等を把握する。

● 記録方法の見直し

・「患者満足度の向上」「継続看護に結びつく看護ケアに対する病棟看護師の意識向上」
「病棟看護師が実施する継続看護に結びつく看護ケアの増加」を評価できる内容を目指し、
まずは、看護師が実施した形跡を残すことから始める。

・外来でICを実施する際、外来看護師の視点で「入院カルテ」の中に記録を残しているが、
その内容が外来看護に生かされるような、継続的な記録の活用方法の検討が必要。

Point!

継続看護にむけた記録に関する支援施設からの助言

✓ **支援施設では、患者や看護がどのようになると良いか、といった理想像をスタッフに挙げてもらい、概念図の作成や病棟会での検討を実施した。まずは好事例の共有ができれば十分ではないか。**

取組状況

プレテスト実施による成果・効果

- 外来看護師が病棟訪問を行うことで、患者の情報を事前に把握でき早期介入につながるなど、退院後の外来受診時の看護に生かされている。
- 病棟看護師だけでなく、リハビリスタッフやソーシャルワーカーなどとも話し合う機会が増えたことで、他職種との関わりの強化と、より患者の詳しい情報が得られるようになりつつある。
- 看護師が他部署を知る機会が増え、キャリアアップにつながると考えている。

Point!

支援施設からの助言

✓継続看護の推進を目的として、看護記録による情報共有に加えて、外来看護師が病棟のカンファレンスに参加してみてはどうか。

✓今後、病棟・外来間の連携に加えて、手術室や透析室との連携もできるのではないか。

外来看護師による病棟訪問の様子

取組状況

■ 目標に対する評価

- 外来看護師が、継続看護を目的として、入院中の患者訪問を行う体制を構築することができた。
- 病棟看護師が、継続看護を目的として、退院した患者の外来受診時に患者訪問を行う体制を構築することができた。
- 患者訪問を行うことで、患者のカンファレンスに参加する意識を看護師がもつことができるようになった。
- 取り組みを通じて、看護管理者が部署・スタッフを俯瞰的にみることができるようになった。

試行に取組んだことへの、スタッフの反応

- ✓ **自分たちの看護の質向上を図りたいと思っていたようですが、外来係長としてどのように動いたら良いのか、どのようにシステムを成立させていけば良いのか、考える機会となり、学びとなったとの反応がありました。**
- ✓ **自院だけでは進めることが出来なかったところに、いい機会になったと発言がありました。**

今後の展望

- 情報共有の推進に向けて、病室訪問での記入事項のテンプレート化（患者の反応、表情、療養生活に対する思い等を含めた定型文作成）、電子カルテを有効活用した情報の一元化を図る。

- プレテストを実施し、外来看護師の相談相手、ファシリテーターの必要性を実感した。今後この取組を継続するためのサポート体制の構築も検討する。

- さらなる継続看護の実現にむけて、外来看護師の退院カンファレンスへの参加を開始する。

- 病棟の看護師も外来への訪問を行う(退院時の問題点を外来で確認)。

- 2021年4月には、整形外科領域の看護業務一元管理の運用方法を確立し、１年後を目処に、全診療科の外来・病棟で訪問を実施する。